



長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

でした。

「もしも近藤誠理論のように、がんを放置していたならば、絶対に今、僕は生きてはいません。がんは、手術ができればラッキーなのです。逃げてはダメですよ!」

当事者である関原さんの言葉は、医者の私が言うよりも遙かに真実味と説得力がありました。

私は、近藤先生のおっしゃるがん放置療法を全否定するわけではありません。しかし、それが有効なのは、後期高齢者の人がほとんどでしょう。がんより先に寿命が尽き、天寿が尽きる人は多くいます。

関原さんは動き盛りの30、40、50代をがんと何度も闘いながら生きました。さらに驚くべきことは、その間ずっと銀行マンとしても活躍されていたことです。

「ちょうど金融の大激動期にあたり、面白くかつ責任のある仕事が続いたため、余計に死ねないという気持ちにさせられた」と著書の中に書いておられます。

がんを克服できたのには、仕事を辞めなかったことも大きく起因しているはず。

こうした経験を踏まえ、「がんになっても働ける社会づくり」のために講演会などを行い、対がん

協会での活動に邁進(まいしん)されていました。

さらに関原さんは、ようやくがんを克服した20年ほど前に、今度は心臓の疾患が見つかり心臓バイパス手術を受けています。

その頃より死のシミュレーションをすっかり行い、「〇〇の場合は延命治療はしない」と具体的に書いたリビングウィルを、奥様に渡していたそうです。そして、死の前日まで元気に活動されていた関原さんは、その朝、ご自宅で急ではありましたが穏やかに旅立たれたようです。著書の中で、こうも書かれています。

「病気の最大の支えは、良き人間関係。それまでの人生で、どういった人間関係をもってきたかが闘病を支えるすべてだと思います」

良き仕事をする、良き人間関係が必ず得られます。だからこそ、がんになったからと仕事をあきらめては、もったいないのです。

しかしこの人は、70代まで生き切りました。日本対がん協会の前理事で、元みずほ信託銀行副社長の関原健夫さんが11月24日、73歳で旅立ちました。死因はがんではなく、心不全とのこと。

85 日本対がん協会前理事 関原健夫



がんになっても仕事を諦めない